

いふものであらう。物狂は、藝の方面から見れば「面白い」のであり女物狂は「花のやうに美しくて面白い」のであるが、その心の方から見れば「忘我遊神」といふことになる。三井寺では月下に狂女が鐘を撞くところに、支那の詩人に關する傳説を引いて「詩狂」といふことを紹介してある。また籠太鼓や高野物狂には「風狂」といふことばをつかつてある。こゝで「風狂じて」といふのは倭漢朗詠集の「落花狼藉たり風狂じての後」から來てゐるにちがひないが、朗詠では他に風狂の語は無いし、この一例も單なる自然現象として無心に使はれてゐるが、謡曲の方は決して無心の自然現象だけをあらはしてゐるものだとは思はれぬ。人間の情が加はつた有心の用の方である。だから詩狂や風狂には一つの精神があらはれてゐる。そしてこれがまた物狂の藝の精神的な系譜として考へられねばならぬ。

たとへば一休の狂雲集に「伴歌爛醉我風狂」といひ「風狂狂客起狂風」といひ「狂客江山三十年」といふがごときは、兼好の「あやしうこそ物狂ほしけれ」とともにこゝに考へ合せなければならぬものであらう。室町時代に於いて「風狂」といふ文學意識がいかにしておこつたかは、これまた一つの興味ある問題であるが、一休の如き能樂と深い接觸のあつた人の詩精神は、能の上にもあらはれてゐると考へられる。

女物狂の能は古代に淵源する物狂の藝能に、風狂といふ新時代の藝術精神が加はつて、世阿彌によつて、美しさに深みを加へた幽玄艶麗なものとなり、幽靈物とは別様の超現實のおもしろさを加へ、忘我遊神と人情の悲劇といふ二つの異つたものゝ獨特の綜合、又は混和又は融合したものとつくり出された

ものである。

カニシユカ朝における沙 落迦僧院の歴史的役割

佐々木教悟

カニシユカ王の治世におけるクシャーナ王國の勢力が、西北インドを本據としてガンガー中流のベナレスからヴィンドヤ山脈の線にまで達し、カーシユガル、ヤルカンド、コータン等の西域諸地方はもとより、イラーンの東北部から遠くアラル海にまでおよんでいたことは、ほぼ確實と見てよからう。そして王が單なるインドのみの皇帝でなかつたということは、かれが使用した諸種の稱號から見ても明かである。王のかような地位は、當時の文化交流のすがたをよく暗示している。とくに王はインドの影響と佛敎とを東部イラーンとコータンとに樹立するためにその生涯を送つたともいはわる (L'Inde classique §. 43)。カニシユカ王のコータン出身説は、近年いよいよ有力となつてきた。ヘイレイ H. W. Bailey が紹介した (RAS 1942, p. 14) 敦煌出土のコータン語の寫本 (The Pelliot Collection, p. 2787) は一九四行よりなる斷片であるが、一—一五三行にはコータン王の性質およびその活動について述べ、一五四—一九四行には Kanaska とかれの Katyamitra (精神上の友) なる Asagausa の行傳を述べようとする。そこにいふ Kanaska が Kaniska を、Asagausa が Asvaghosa を指すものなることは明かである。シナ・トルキスタンの東端に位置する

コータンと同じく西端に位置するカーシユガルと更に西方のバルチャとの間の、當時における政治的な関係交渉は、交通上のルートの上から考へても、ひじょうに密接なものがあり、それはサンガウルダナのコータン史の記述からも、よく窺われるところである。

ヒンドゥークーシユ山脈の北にあつて、それを後ろ楯にするカーシヤ Kāpisa (迦畢試國) は、インドとバクトリアとの間の通商本道を支配する要地である。カーシユカはこの地にかほどの足跡をのこしたのであろうか。フーシユは深い造詣のもとに、その足跡を根氣よく辿つた (Kaniška et la Conversion du Kapisa, La vieille Route, II, pp. 277-280)。西曆六三〇年に玄奘三藏がこの地を訪れたとき、都城の東三、四里のところに沙落迦 Chalo-ka と名づける大伽藍があり、その僧院には三百餘人の僧徒がいていづれも小乗の法教を學んでいた。この僧院はカーシユカ王が自分のところへ送られてきた質子を居住せしめるために建立したものであつた。玄奘三藏は僧院の諸屋の壁に質子が圖畫されているのを眼の當り見た。そしてその容貌と服飾があまりにもシナ本國人に似ているのに驚いている。質子は河西の善威の王子であつた。それは安帝の元初中 (一一四—一二〇) 疏勤 Kashgar の王、安國がその舅の巨盤を月氏のもとに送つたと記録されているもの (後漢書西域傳卷一一八) と同一事を指すと見做されている。北京の馮承鈞氏はこの問題を追究して、その説の妥當なることを證明しようと試みた『迦膩色迦時代之漢質子』漢學一輯、一九一—二五頁。しかしながらこれはカーシユカ王の即位年時の問題とも關連し近年

有力化してきた一二八年、もしくは一四四年説のいづれをとつても説明できないという難點がある。今後更に究明されなくてはならない問題であろう。玄奘三藏は、質子が故國に還ることができた驕も舊任のこの僧院を忘れず、山川遠く隔つていても僧院への供養を絶やさなかつたこと、および僧院の側でも、僧衆は毎年安居の終了ごとに大法會を催して、諸質子のために「祈福樹善」することが、その當時まで繼續されていたことを感慨の面持で記録している (西域記卷一)。諸質子と述べているからには質子は一人ではなく、疏勒以外の地からも來っていたのではなからうか。玄奘三藏は他に多くの大乘の寺院があつたにもかかわらず、この僧院に宿泊し、しかもそこで安居をすましている。そこには同行の小乗僧慧性との關係もあつたのであろうが、漢の質子の住した寺という特別の親近感のあつたことが看取される。質子たちは有部の經教律儀にもとづいて習學した。僧院の北の嶺上には質子が習定するための數個の石室が造られてあつた。かれらは僧院修復の際の費用にあてるために黄金や明珠を持參してきて、地下に埋めていた。それは玄奘三藏往訪の時まで埋藏されてあつたと見えて、僧衆の請いによつて、三藏の指圖のもとに發掘されている。いづれにしても、カーシユカ王の手厚い待遇をうけて、かれらは僧院に居住し、佛教的な教養を身につけたであろうことは確かである。疏勒の質子は本國に歸還して直に王位についているが、このような王が佛教の弘通に對していかなる役割を果すことになるか、けだし想像するに餘りがある。

フランスのアフガニスタン考古學調査團は、一九三七年以來

Koh-é-Pahlavân — シュニエによれば、それは靈感をうけた丘陵——の麓の發掘調査を行つた。そして Shotorak においてついにシナの質子の住んだといわれる僧院の址を探し出した (Le couvent des otages chinois de Kanīša au Kāpīša par Meunier, J. JA 1943-45, p. 153)。しかし沙落迦の原語については、學者によつてその見解はまちまちである。最初のシラブルは、玄奘の時代には *initiale cacuminata* にして、單なる *palatale* ではなく、したがつて *sa* にして *so* ではないといはれる。また *diminutif* は、サンスクリトでは *aka* であつて *nika* ではないともいわれる。もしそうであるとすれば、従來多くの學者が比定する *saiika* は問題である。やはりデューディエが採用するヂェリアマンの *Cha-lo-ka* (*Charaka*) には捨て難いものがある。そしてこのシャラカは疏勒(沙勒とも書かれる)を寫したものとする説に賛同したい。かの質子が冬の期間居住したといわれるインドの至那僕底國は(拙稿「至那僕底攻」印佛研、三ノ二)、シナの質子が居住したという因縁によつて、その國號がうまれたという格別の由緒をもつているが、今も主として疏勒の質子が居住したという因縁のもとに、僧院名に疏勒すなわち沙落迦なる名がつけられていたものではなからうか(遮羅迦を遮勒と書く例がある)。ギルシュマンもシュニエも

デューディエも疏勒との關連についてはならん觸れるところがない (Bégram, recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans par Ghirshman, R., P. 146; Contribution à l'étude de l'art du Gandhāra par Deydier, H., p. 101)。以上の考察によつてもほほ知られるように、疏勒との間の關係が考へられるころの、沙落迦なる僧院がカービシー・ベグラームに存在した事實は動かすことのできないものである。それは玄奘三藏の時代まで存続していたが、とくに質子の居住という特異なケースによつて、この僧院がカニシユカの治世において佛教弘通のために、はたまた文化交流のために果した役割については、それ相當に評價せられてしかるべきものをもつているのでないかと考えられる。

彌勒と韋提

名畑應順

右講演要旨は講演者の若干の補筆を得て本誌上に論文として掲載いたしました。
—編集者—